

■■■ ベトナム人介護初任者研修受講拒否 ■■■

3月中旬に新長田駅近くで、I校の「初任者研修受講生募集」横断幕が目に入ったので、電話して申込書を送ってもらいました。「定員があるので申し込みの際は事前に電話して確認下さい」と書いてあったため電話をしました。ところで「ベトナム人4名の申し込みです。名前は…」と話したら「この講座は講師が一人のため、外国人受講生は受けられるかどうかは講師に聞いてから返事する」と言われました。数日後、I校は「外国人の受講について県に相談した。県は『受講できない環境なら断ってもいい』と言ったので、今回はベトナム人の受講を断らせて下さい」との返事でした。

KFCでは外国人だということで断るのは問題だと指摘し、県職員（介護保険課介護基盤整備班長など）3名とI校関係者3名に来てもらいました。県は「ベトナム人は卒業できないとかわいそうだと考えて、そういう判断した」と、この指導は差別だと認めませんでした。I校の言い分は「前の講座で韓国籍の受講生がいて、介護専門用語の習得に大変苦労したので今回は4人になると卒業させる自信がない。外国人を受講させないのは外国人差別に当たるのかどうかと思って、県に相談した。県がその指導（断ってよい）だったのでそのように返事した」と言いました。

神戸在住のベトナム人は、ほとんど靴関係の仕事です。しかし、忙しい時と暇な時の差が大きく、収入が不安定で、転職したいという相談がこれまでも多かったです。中には、「介護」という仕事に興味を持って、介護の仕事をしてみたいと4件の相談がありました。この4人は、この受講を待ちに待ったことでした。名前がカタカナというだけで日本語が出来ないという判断は、絶対間違っています。日本名を持っていても日本語が全くできない人がいることもあるのです。彼（女）らが安定した仕事を希望しているのにこんな形で潰されるのは残念でなりません。

話し合った結果、県は間違っただけだと指導したことを認めました。I校は受講させ、KFCは日本語の面をできるかぎりフォローすることになりました。講座の説明会に4人と参加し、教科書を拝見させて頂きました。I校は2日間、受講して、もしついていけなければやめてもいい、受講料を返金することまで提案してくれました。ついていく自信がない2名は受けることを諦め、2名だけ受講し、予定通り見事に卒業しました。そして既に介護の仕事に就いています。

今回はたまたまKFCが関わったことで解決できましたが、泣き寝入りするケースは多くあるだろうと思います。行政ですら外国人差別を平気ですることは決して許せません。このようなことがこれからも起こらないことを願っています。（ハ ティ タン ガ）

■■■KFC日本語プロジェクト■■■

◆しながたぐにづか第4回ローカル&ワールドフェスティバルへ出店しました

7月16日（土）の昼間、新長田駅近くの大正筋で、第4回ローカル&ワールドフェスティバルが開催されましたが、それに、KFCで日本語の勉強しているメンバーが屋台を出店しました。メンバーは、フィリピン出身のアレリアノ・アーミーさんと息子さんのトリストアンさん、大山レイシエルさんと娘さんとダイアナさん、山道ジョアンナさん、西海マルシアさんの家族で、フィリピンの料理を出しました。

以下は、大山レイシエルさんと山道ジョアンナさんの参加した感想です。
最初、イベントの話聞いて、楽しそうだし、そのような経験してみたいということで友達を誘って出店してみることにしました。八口八口（サババナナ・タピオカ・紫芋・クリスピーライス・ヤングココナツの実・フィリピンプリン・アイスクリームがミックスされたフィリピン式かき氷）、クエクエ（ゆで卵に小麦粉とオレンジ色の色粉を水で溶いたものをつけて揚げて、甘辛いソースか酸っぱいソースのどちらかをかけたもの）、焼きビーフン（ビーフンに鶏肉・にんじん・キャベツ・タマネギ・ニンニクを入れ、醤油ベースで炒めたもの）、チュロン（サババナナやジャックフルーツを黒砂糖で味付けして春巻きの皮で巻いて揚げたもの）などで、結構手の込んだ食べ物でした。事前にフィリピン特産の食材を仕入れて前の日の夜までに材料の下ごしらえをし、手際よく調理して皆さんに美味しく食べていただけるよう準備しました。当日は、日本

の人、フィリピンの友人、外国の人などたくさんの方に来ていただき、美味しく食べてもらいました。残念だったのは、作るのが一番大変で自信作でもあった八口八口の売れ行きがもう一つだったことです。日本人にはあまり知られていないせいかもしれません。売り上げの方はトントンでしたが、店に来られた人との楽しいやりとり、久しぶりのフィリピンの友達との再会、家族の手伝いもあり、非常に楽しい時間をすごすことができました。このような機会があれば、また、是非やってみたいと思いました。(インタビューアー 川淵 啓司)

■■■ K F C 外国にルーツを持つ子どもの学習支援 ■■■

◆ 理科実験教室「空気のパワーを体感しよう」

8/2(火)KFCにて理科実験教室「空気のパワーを体感しよう」を実施しました。

灘校物理研究部の部員がKFCの学習者である小・中学生13人の前で、空気に関する様々な実験を行い、最後には参加者全員が「浮沈子」の工作に取り組みました。空気の力で缶やペットボトルが潰れる様子など、アトラクションの要素のある実験を楽しむということから始めて、参加者の小・中学生が理科に興味を持つということを狙い、企画されました。参加者は、目に見える変化に感動した様子でした。

減圧装置の中でお湯が沸騰するという、日常生活の中では見ることのない現象は、とりわけ小学生の興味を引きました。料理で使う「圧力鍋」や富士山の山頂ではお湯が地上のように温まらない話など、非日常の実験の中にも私たちの生活との関連があるという点を強調しました。また、一連の実験には、「なぜ」この現象が起こるのか、簡単な説明を付け加えました。こうした授業を通して、実験を単なる見せ物として楽しむというだけでなく、その先にある理科に参加者が関心を向けるということを目指しました。

最後に参加者が取り組んだ「浮沈子」の工作は、全ての参加者がうまく動作させることができました。浮沈子は、ペットボトルを手で握ると中の錘が沈むというオモチャで、小学生でも短時間で作ることができます。浮沈子を自分の手で作り、その不思議な動作を観察することで、理科の実験を特別なものと捉えるのではなく、むしろ、理科に親しめるということを狙いました。

灘校物理研究部代表の上田朔はKFCにて学習支援に関わっており、今回の理科実験教室の実施に向けて、同部活の部員の力を借りて、授業計画を作ってきました。また、あらかじめ予備実験を行い、実験の内容をKFCの教室という環境の中で行えるようにアレンジしました。ここでは物理研究部顧問の協力も得ました。

理科実験教室が終わった後には、物理研究部の部員と参加者の小・中学生はホットケーキを食べながら交流しました。実験の内容に関する質問や、夏休みの理科の宿題に関する相談などもあり、部員・参加者の両方にとって、有意義な時間を過ごせたと思います。

(灘校物理研究部代表 上田 朔)

◆ 「K F C みんなのダイニング」がはじまりました！

厚生労働省の2012年の調査によると、全国の18歳未満の子どもの相対的貧困率は16.3%で過去最悪を更新し、約6人に1人の割合で子どもが貧困に直面しています。一人親や共働きで親が忙しかったり経済的に生活が苦しかったりして、インスタントラーメンや菓子パンで夕食を済ませる子どもや、子どもが一人で食事をする「孤食」が広がっています。また貧困問題と言っても経済面だけではなく、子どもと親が接し、家族の団欒や親子の愛情と繋がりを育む時間をつくることのできないという現状もあります。そこでKFCでは、「子どもたちを孤立させない、人とつながる、希望をつなぐ、学びの場となる=えん(縁・円)を持つ」をコンセプトに、子どもたちと料理を作り、様々な年齢層の人たちが集まり食卓を囲んで食事をして、話したり遊んだりする中で、

子どもたちに料理を含めいろんな学びの“場”を提供したいと、7月から毎週金曜日、デイサービスセンターハナの会の場所をお借りして、「KFCみんなのダイニング」をスタートさせました。子どもたちは小学生7～12歳が中心で、毎回10名ほどが参加しています。先月は中学生も参加してくれました。高校生は調理のお手伝いや子どもたちの活動のサポートをするボランティアとして参加してくれています。時間帯は17時30分から20時までで、子どもたちは17時30分頃に来て、早々にエプロンに着替え「お手伝いする！お手伝いがしたい！」と調理の手伝いから、食前の準備や後片付けまで積極的に関わっています。最初はやりたい手伝いが重なり、譲り合うことが難しい場面もありましたが、高学年の年長者が年少者に任せてくれたり、食事の時にも年少者を気遣い、お世話する姿が見受けられるようになりました。そして食事の前には簡単な会を設け、その日のメニューについての豆知識をクイズ形式で行ない、食に関する学びを提供しています。その会の司会も子どもたち2、3人が一組になり、順番に進行してくれています。先月参加している子どもたちからこんな言葉がありました。「なんで金曜日だけなん？毎日みんなのダイニングしたらいいやん。みんなで食べると美味しいねん。」単に食事だけの場ではなく、みんなと遊んだり、勉強したり、談笑したり、そして子どもたちが安心できる居場所となり、悩みを相談したり、将来への希望を考えられる場にしていけたらと願っています。
(ダイニング居場所コーディネーター 河藤 一美)

■■■ KFC中国帰国者支援事業 ■■■

◆コープこうべ工場見学を終えて

日本に来て初めて日本の工場を見学しました。1960年代生まれの私には初めての現代の工場に入られた機会でもありました。これまでの工場のイメージはすべて人の口コミからでした。今回、初めて自分の目で日本の工場の様子を見ることができました。

コープ神戸工場は歴史が長く、規模も大きい工場でした。そして、工場の衛生環境だけではなく、生産環境もとても素晴らしかったです。初めて稼働している生産ラインを見ました。非常に現代的でとても感動させられました。

コープ神戸工場の食品の原料はアメリカ、カナダ、中国から輸入してくると聞きました。きれいな生産環境は、この工場生産している商品を購入している私たち見学者に安心感を与えてくれました。消費者の健康も考えて食品を作り、毎日私たち消費者に提供することに感謝しています。また最後に試食とお土産でいただいたコープ工場の焼きたてパンはとても美味しかったです。（上本 芳子）

初めてパン工場を見学しました。初めてパンを作る機械を見ました。一つの生産ラインに従業員が一人しかいなく、工場には従業員がとても少なかったのが印象的でした。現代化されたとても素晴らしい工場でした。また食品作りでは、年配の人や赤ちゃんなどの年齢層のことも配慮していました。例えば、年配の人向けの商品や赤ちゃん専用のうどんなど数々の商品がありました。働く人は少なかったですが、製品の品質はとても高かったです。従業員一人一人は非常に真面目に仕事に取り組んでいました。私たち見学者にもとても丁寧に接してくれました。最後に特別に用意してくれた試食とお土産の焼きたてパンはとても美味しかったです。（今江 ゆか子）

■■■ ハナの会 ■■■

◆恒例夏祭り

8月3日、4日、5日と三日間行われました。3日と4日は、須磨の風のフラダンスとウクレレで、5

日は銭太鼓でした。

3日（水）は、先ずは楽しみにしている食事です。キンパとちらし寿司、チャプチェ、唐揚げに蒸豚、サラダ、フルーツ盛り、ご馳走をたくさん美味しく頂きました。

須磨の風は、フラダンスとウクレレの演奏、フラダンスは動きが言葉です。ゆったりした音楽に身体がしなやかに動き、手の表現は綺麗でした。オモ二たちも見ている内に手まねをしたりしていました。ウクレレのやさしく奏でる音が心地よいので寝むくなる事もありました。

4日（木）ベトナムデイでは、初めての夏祭りで、調理の石田さんが頑張ってくれて、生春巻き・揚げ春巻き・焼きそば・ピーナッツご飯・スープにサラダ・デザートでした。須磨の風の方も演奏の後に大変喜ばれ食事されました。フラダンスを中心にとりいれて、言葉の壁があってもダンスで盛り上がりました。

5日（金）銭太鼓の方たちでした。前にも来てくださっていますが、初めて銭太鼓の意味を説明してくださり、私は理解ができました。前日のゆったりした音楽と違い軽快なバチの動きに目が行きます。飽きることなく、また途中でスタッフも加わり、バチを持ち参加し教わった動きを音楽に合わせて、バチを振ります。思ったより振れました。みんな楽しめました。

他に三日ともスイカ割りゲームもして、簡単ながらも皆がおおはしゃぎしました。そして、割れたスイカをおいしく頂きました。

今年は暑さが長く続き身体のコントロールも難しく夏バテ。ちょっとした息抜きと気分転換ができ、喜んでいただけただなら幸いです。スタッフ一同皆様のご健康をお祈りしています。来年もまた楽しく夏祭りを企画・実施していきたいです。（竹宮 章子）

■■■ グループホーム・小規模多機能型居宅介護八ナ■■■

◆初めての家族会

グループホーム八ナ・小規模多機能型居宅介護八ナ合同での、初めての家族会が7月24日（日）に開催されました。グループホーム始めて以来、「いつかは」と思ってきたことでしたが、ある運営会議でのご家族様の要望に背中を押される形で実現に至りました。結果的には、盛況のうちに終了。職員一同、ほっと胸をなでおろし、「やって良かった」としみじみ感じました。

でも、実現に至るまでは、初めてのことだけに、「何を」「どのように」進めていいものか見当がつかせませんでした。初めて顔を合わすご家族様も多いため、あまり畏まった場にならないようにお食事会形式にすることとし、普段、利用者が召し上がっている食事、且つ、八ナの特徴を出すため、韓国料理をメインに2階リーダーの金松恵さんが約20人分の料理を作ってくださいました。食事前には、山根施設長から開設以降のグループホーム・小規模多機能型居宅介護八ナの歴史やこれまでの取り組みを報告、食事後に、自己紹介と家族さんからの要望を聞くという流れになりました。

事前の計画では、利用者も家族と一緒に1階リビングで食事を召し上がってもらう予定でしたが、思ったよりご家族様の参加人数が多く実現できませんでした。リーダー同士では、「食事中にしーんとしたら、どうしよう。場がもたないよね」などと心配をしていましたが、さにあらず、初めて顔を合わす家族さん同士でも、大変、会話が盛り上がっていました。

食事後、コーヒーを飲みながら自己紹介をしていただき、意見や要望を聞く場面になりました。最初こそ声は上がりませんでした。徐々に様々な意見や想いを話していただけるようになり、ある一つのテーマについては、複数のご家族様から意見があがり、施設側の考え方も伝えたりなど、有意義な話が出来たように思います。また、家族会を希望されたご家族様をはじめ、運営推進会議に出席して頂いている方々は、家族という立場からですが、八ナをサポートしていただい

たようにも思います。

帰り際には、皆さん「お食事美味しかったです」といわれ、笑顔がたくさんみられました。運営側のことも分かり、他のご家族様と会えて話せたことで、安心感もあったのかと思います。今後は、半年に1回のペースで開催しようということも決まり、次に繋がる良き場になりました。今後の家族会の発展が楽しみです。 (森 佳緒里)

◆Yさんの看取りを経験して

Yさんの看取りをして、いろいろ思い出す事があります。

私は、ここハナに入り4年目になります。ハナが設立と同時に入り、何も無いまま、何も分からないまま、スタッフ一同でいる物をそろえてからのスタートでした。最初は満室ではなかったため、利用者様はみな同じ階にいました。その中に、Y様もいました。日ごとに、利用者様もそろい、階がわけられました。

Yさんは、当時から徘徊があり、ずっと歩いていました。壁があると向きをかえて、ずっと歩き続けていました。ご飯も歩きながら、スタッフが追いかけて食べてもらっていました。止まることなくずっと歩いていました。夜も、寝るのは、疲れて眠るという感じで、2~3時間寝てくれればいいほうでした。スタッフ一同、寝てもらえるように、添い寝をしたり、肩をとんとんとしてみたり色々しました。

それから、Yさんは足を骨折され、ベッド上での生活になりました。布パンツだったのに、オムツになっていました。しかし、ベッド上でもYさんはお元気でした。食物は、少食でしたが食べておられ、お風呂も好きでした。ずっと歩き続けていたYさんですが、ベッドではよく寝ておられ、歩いていた頃が不思議なくらいでした。

今年の6月上旬から微熱が続き、食事が摂れなくなり、飲み物もゆっくりしか飲めなくなりました。痰吸引もすることになりました。みるみる痩せていき、もともと細かったのですが、さらに痩せていきました。だんだん弱くなっていき、声も出せなくなっていました。元気だったYさんの姿が見られなくなっていました。約1ヵ月後にYさんはお亡くなりになりました。私は、Yさんの最後の顔を見られませんでした。4年間精一杯お世話をさせていただき、4年間を思い出し、私は顔をみることはできませんでした。

今後、看取りを希望される方も増えてくると思います。Yさんの経験を生かして、他の利用者様も、この施設で過ごせて良かったと思ってもらえるような介護をしたいです。 (尹 舞衣)

◆「多文化共生」を考える研修会2016

今年も8月に4回にわたって、「多文化共生」を考える研修会2016を開催しました。

1日目は、ルポライターの杉山春先生より、これまで出会ったフィリピンに繋がる子どもたちから見てきたこと、人種ではなく階層で繋がり始めている実態や、その人として見ることの大切さをお話いただきました。

次に兵庫県から「ひょうご多文化共生社会推進指針」についてと、兵庫県立大学の乾美紀准教授から、これからの多文化共生のあり方ということで、アメリカの事例などをご紹介いただきました。

3日目は、「世界の難民・移民とシティズンシップ」というテーマで、難民を助ける会の景平義文プログラムオフィサーからはトルコのシリア難民の状況を詳しく、大変わかりやすくお話いただき、ニュースを見ていてクリアではなかった部分もよく理解できた等のご意見をいただきま

した。

次にドイツ在住のトルコ系住民の社会統合やシティズンシップについて、東北学院大学の石川真作准教授よりお話しいただき、ドイツの社会統合の現状と難しさなどあまり聞くことのできないお話をしていただき、非常に充実した内容でした。

4日目は「被災地福島の移住女性と子どもたち」というテーマで、東日本大震災後に福島県で活動されている中国人当事者グループ「つばさ」の城坂愛さんと、その団体を支えるグループ福島移住女性支援ネットワークの佐藤信行さんより、継承後教育や国際結婚家族全員を巻き込んだ取り組みなどの活動の報告をしていただきました。

次に東海外国人サポートセンターの王榮代表より中国人帰国者コミュニティサポート事業ということで、帰国者についての歴史的な概要から、現在取り組まれている介護通訳養成やしゅくみについてお話しいただきました。

以下が一番参加者の多かった2日目の『外国にルーツを持つ子どもの教育』についての報告です。8月19日に海外移住と文化の交流センターで、上記の研修会が開催され、関係者含め91名の参加がありました。

(1) 「浜松における外国にルーツを持つ多様な子どもたちの現状と課題、そして未来～」

講師は静岡文化芸術大学の池上重弘教授でした。

日本の在留外国人数は1990年代に年間で200万人強となっているが、2008年のリーマンショックを境に国籍別に見ると、ブラジルが急減、韓国・朝鮮が漸減し、中国が最多となり、フィリピン・ベトナム・ネパールが増加している。浜松市においてもブラジル人が半減しているが、日本生まれ日本育ちの子どもが増加しており（2014年4月入学の小1は日本生まれが59%で、ブラジル・ペルー・ベトナム人が多い）、高校進学率は80%台であるが定時制が多い。市教育委員会・浜松市・国際交流協会が連携し、教員の加配、児童生徒相談員・就学支援員・就学サポーターを配置して対応している。また、第二世代の若者の台頭も顕著で、大学に進学し語学力や異文化適応能力を生かして大企業で活躍するグローバル人材や地域活動の担い手も出てきており、多文化共生や教育の分野にも積極的に関与している。

浜松市の隣の磐田市でも、ブラジル人を中心に外国人が集住する団地があり、小学校・自治会（主導的役割を果たしている）・磐田市多文化共生社会推進協議会が連携して支援を行い、うまくいった例として評価されている。アンケートを取ると、明確な永住希望者は40%強で、子どもが将来日本で生活することを希望する人も80%弱で、子どもに専門職・管理職を望む親が60%占めており、親の意識の変化がみられる。

一方、第二世代の格差が拡大しており、日本語はおろか母語も中途半端な一方、日本での生活に慣れ、親世代が従事していた重労働には耐えられずバイトでつなぐ底辺層も存在している。今後、公教育の枠組みの強化（専門知識と技能を持った教員の養成、地域人材を支援員等として安定雇用できる枠組みづくり等）、連携した枠組みづくり（学校内外のリソースの連携等）、産業界への働きかけ（足元のグローバル人材の採用、地道な就業支援、新たな職人像の開拓等）が必要とされる。

(2) 「兵庫県における子ども多文化共生教育について～外国人児童生徒のための学習支援事業の取組～」

講師は兵庫県教育委員会事務局人権教育課 樋口正和課長でした。

2015年の兵庫県内の在留外国人の数は約9万7千人で、日本語指導が必要な外国人児童は838人でその言語は中国語（29%）、ベトナム語（28%）、フィリピン語（11%）、ポルトガル語（10%）となっており、県内の246校に在籍している。在籍人数で見ると、小学校が63%、中学校が28%となっている。外国人児童のために、自己実現を支援するための取組（日本語習得、母語・母文化の保持、自立・学習・進路指導）、豊かに共生する心をはぐくむ取組（新しいもの、自分とは異なるものを受け入れる感性を育む）、多文化共生にかかるネットワークの充実に向けた取組（市教委、NGO／NPO等関係機関・団体、地域、大学、企業との連携での取組の推進）を進めている。

（ニュース係 川淵 啓司）

■■■ 今後の予定 ■■■

■日本語プロジェクト

「日本語ボランティアのための基礎講座」

9月25日～10月23日 全5回

於 新長田勤労市民センター会議室

■KFC帰国者新長田交流会

9月20日(火) 農業体験

9月13日(火) 敬老会

■多文化子ども共育センター

10月8日(土) 子ども・青年の人権研修会

於 新長田勤労市民センター会議室